

広島アートプロジェクト2009「いざ、船内探検！吉宝丸」展

報告：柳 幸典、岩崎貴宏

平成 21 年度指定研究

「広島アートプロジェクト2009 現代的芸術表現を通して地域社会・企業との連携を推進する人材の育成強化」

研究代表者：柳 幸典

研究分担者：

大井健次（芸術学部教授）

鰐澤達夫（芸術学部教授）

加治屋健司（芸術学部准教授）

岩崎貴宏（芸術学部非常勤助教）

今井みはる（芸術学部協力研究員）

齋藤彩佳（芸術学部協力研究員）

友枝 望（芸術学研究科修了生）

鹿田義彦（芸術学研究科大学院生）

研究協力者：

辻原咲紀（芸術学部生）

梶木淳子（芸術学部生）

坂本 史（芸術学部生）

田邊美奈子（芸術学部生）

仁下愛美（芸術学部生）

中島 優（芸術学研究科大学院生）

ディレクターズ・メッセージ — 神々が宴する宝船

報告：柳 幸典

本企画「吉宝丸」は、太田川水系の分流が形成する広島デルタの6河川に囲まれた5つある三角州の一つである吉島地域を主な舞台とした、地域と広島市立大学芸術学部そして広島アートプロジェクト実行委員会の連携による広島アートプロジェクトの国内第3回目の企画となる。¹

1回目の2007年度企画「旧中工場アートプロジェクト」は都市軸を念頭にピースセンターと中工場を結ぶ軸線上をフィールドとして企画を構成した。その軸線上に位置する被爆建造物の旧日本銀行広島支店と旧ゴミ焼却施設（旧中工場）、そして旧中工場を抱える地域が展覧会の主な会場となり、地域をパブリックとプライベートが交錯する表現の「庭」ととらえ、都市の遊休施設のアートによる活用を提案するとともに貨幣システムとゴミそしてアートとの関連性を考察した。3つの場による3つの企画はそれぞれに場の歴史性・社会性と深く関わり、サイトスペシフィックな特徴が際立つように全体として一つの展覧会として相互補完的效果をねらいディレクションした。

2回目の2008年度企画「汽水域」は、山と海の狭間で川に囲まれたデルタに形成された広島の都市の地勢的特徴に着目し、その汽水域特有の淡水と海水のせめぎ合いをメタファーとして、戦争と平和、グローバルとローカル、定住と移住の対立を考察した。背景には日系ブラジル移民100周年があり、広島はもっとも多くの移民を海外に送り出した県の一つであった歴史がある。国際交流の姉妹企画として、現在多くの移民を受け入れているベルリンでの海外展「CAMP ベルリン」がドイツで先駆けた。汽水域をコンセプトとして移民の歴史を扱っただけに、地域での展示の舞台は船を係留するマリーナとそのエリアが主会場となり、姉妹展「CAMP ヒロシマ」では海外から国籍や宗教の多様な背景の作家を招待した。

そして3回目となる2009年度の本展企画は、前2回の企画による吉島地域と大学との連携の3年間の積み重ねの成果として、地域社会の中に深く関わった展覧会として、まさしく宝石のように結晶したと言える。

前年度企画「汽水域」での広島の地勢的文化資源の考察から発展し、その先の瀬戸内海にある島嶼群へと思いをつなげる渡し船として、吉島の三角州をその船に見立て、我々はその船を「吉宝丸」と命名した。

国土の面積としては世界で60番目に甘んじる日本だが、海岸線の長さでは中国、オーストラリア、アメリカ合衆国の大陸を抜いて6番目に位置することからもわかるように、日本は海に囲まれた海洋国であり海岸線の変化に富んだ島嶼群である。その象徴的存在として大小合わせて3000もの島々があるという瀬戸内海があるの

だが、我々日本人はその価値を本当に評価して来たとは言いがたい。瀬戸内海的美しさが常に海外の目から発見されて来たことは、瀬戸内海という名が The Inland Sea の翻訳から来ているとされることから窺い知れるだろう。²

「吉宝丸」とは読んでの通り宝船をイメージしている。ゴミ焼却施設や刑務所などの迷惑施設を抱え、都市の主要交通ルートからも孤立的な吉島地域をあえて宝船と見立てている。その孤立性を地域の固有な特性ととらえ、吉島地域の三角州を独立した船に見立てて宝船とし、地域の再発見とその先にある瀬戸内海の島嶼群の宝島へと航海する七福神のイメージで展覧会をディレクションしたのである。船首は広島平和記念資料館で船尾は中工場という「平和」と「ゴミ」の宝船である。一艘の船に乗り込む七福神は神仏習合のいかにも日本的な多神教のおおらかさである。商売繁盛・五穀豊穡の神の恵比寿のみ日本の土着の神であるが、大黒天、毘沙門天、弁財天はインドのヒンドゥー教の神で、福祿寿、寿老人は道教の神、そして布袋は実在したという唐の仏教の僧である。なんと国際色豊かで神も仏も架空も実在もこだわらぬおおらかさであろうか！日本の土着信仰に仏教、道教、ヒンドゥー教の個性豊かな神々が一つの宝船で仲良く航海している姿は、平和の可能性を微笑ましくビジュアル化していると考ええる。

前2回の企画と同様のことではあるが、プロジェクトの資金難から「吉宝丸」の出航は極めて低予算で計画された。もし「吉宝丸」が無事に航海できたのだとすれば、前2回の企画による地域の文化資源の探求と地域連携の蓄積、加えて「CAMP ベルリン—ヒロシマ」での海外からの視座の経験、これまでの活動の質と蓄積の評価、そして何より参加アーティストの地域に宝を見出す探知力があつたことであろうと思う。低予算にも関わらずアーティスト達には吉宝丸に乗船していただいたことに心から感謝したい。もちろん現場で汗を流した学生達やボランティアの方々、企画立案と運営に指導力を発揮した岩崎をリーダーとする運営スタッフの労をねぎらい、ささやかではあるがこの記録集が本企画に関わった多くの方々の実りとなれば嬉しく思う。非営利組織であるがゆえ操船の不手際も度々あったであろうが、神仏習合多様な神々が乗り込む宝船の平和的おおらかさとして、寛大に出帆を見守っていただけたらと願う。

広島の世界遺産は広島の世界価値を理解する上で象徴的である。海岸に建てられ海の潮汐をその建築に取り込んだ厳島神社と、広島が世界で初めて経験した原子爆弾の史跡である原爆ドーム。広島アートプロジェクトは常にこの二つの遺産である歴史・風土をサイトスペシフィックに取り込んで来たと言える。

広島地霊＝ゲニウス・ロキをアートの守護霊とし、平和をメッセージとして広島が宝石のような文化を発信していくためには、七

福神の宝船のおおらかさが必要なのかもしれない。地域におけるアートプロジェクトが多様な神々を受け入れ宝船とするかあるいは泥舟とするかは、アートと地域のそれぞれの受容力にかかっている。美術の特権的場所から抜け出し、地域社会の中にその輝く場を見出し吉宝丸に乗り込んだ9・11同時多発テロ以降の多様な神々としてのアート達は、「芸術」の日本的な受容の本来のあり方として、そのおおらかな可能性を示していないだろうか。「芸術」という言葉が外来語の ART の翻訳であることを再確認した上で、「吉宝丸」が七福神的多様性の共存の「術」としての可能性の示唆と同時にアートの存在意義に立ち返ってみるささやかな機会となったのであれば、宝船の船頭として本望である。

本稿は、『広島アートプロジェクト 2009「いざ、船内探検！ 吉宝丸」展』（広島アートプロジェクト、2010年）に掲載した「ディレクターズ・メッセージ—神々が宴する宝船」を再録したものである。

- 1 広島アートプロジェクトの3年間の活動は本展カタログとともに広島アートプロジェクト実行委員会発行の展覧会カタログ『旧中工場アートプロジェクト』（「ゴミがアートになる！超高品質なホコリ」展、「わたしの庭とみんなの庭」展、「金庫室のゲルトシャイサー」展）2007年、『汽水域』（「CAMP ベルリン」展、「CAMP ヒロシマ」展、「旧中2」展）2008年、を参照されたい。
- 2 西田正憲「瀬戸内海の発見」（中公新書、1999年）が詳しい。私の研究領域である瀬戸内海における産業遺構と限界集落のアートによる再生プロジェクト「犬島アートプロジェクト／精錬所」（岡山市犬島、直島福武美術館財団）が最初の構想から13年を経て2008年に完成した。その犬島での第2期計画も含めて瀬戸内の島々で行われる「瀬戸内国際芸術祭」が2010年夏の公開に向けて香川県と直島福武美術館財団により準備中である。



犬島アートプロジェクト「精錬所」



犬島アートプロジェクト「精錬所」
ヒーロー乾電池／ソーラー・ロック



犬島「家プロジェクト」
山の神と電飾ヒノマルと両翼の鏡の坪庭

いざ、船内探検！吉宝丸

報告：岩崎貴宏

1. 世界的金融危機をはじめりとして

その地殻変動は、すでに前回の広島アートプロジェクト2008「汽水域」の準備中に始まっていた。

アメリカの同時多発テロ事件より7年、2008年9月、アメリカのサブプライムローン問題に端を発し、世界を巻き込んだ未曾有の金融危機。瞬く間に世界中に波及し戦慄を走らせた。とりわけ、それを引き金にして起こったアイスランドの国家財政の破綻、その後、国が崩壊寸前まで追い込まれたことは衝撃的だった。

一方、期を同じくして起こったユーロ及び、英ポンドの急落は、1年間の欧州生活を終え、帰国間際の私にも生々しい事実として突きつけられた。1年間生活した国の貨幣価値はいとも簡単に崩れ、握りしめている紙幣から「信頼」という魔法がするりと解けてゆく感覚を味わった。帰国後、日本でも年末年始、公園で炊き出しの列に並ぶ、職を失った大勢の人々の報道が連日伝えられていた。世界的経済破綻は、消費と投資の減退を急激に引き起こした結果、企業が非正規雇用労働者に対し、容赦のない大量解雇という現実的な形で現れた。終わりのない坦々とした日常の延長線上で、海を越えた世界と繋がり、いつの間にか身柄を拘束されていたのだ。

21世紀の始まりにアメリカで起こった同時多発テロ事件は、グローバル化時代の最初の戦争として、一大スペクタクル性を持っていたが、私にとってはあくまでも対岸の出来事として、日常生活において、直結した影響を感じることはほとんどなかった。しかし今回の世界的金融危機は、見た目は派手ではないが、国家から私たちの日常まで、グローバル金融市場の連鎖的なネットワークに組み込まれていたことを顕在化させられた。遠く離れたアメリカの住宅ローンの焦げ付きが、大手銀行の相次ぐ倒産を引き起こし、アイスランドの国家財政の破綻や、日本の失業者の増大へと連鎖的に波及していった。経済学者ならば、この一連の出来事を、ドミノ式の因果と捉えるであろうが、経済事情に疎い私にとっては「風が吹けば桶屋が儲かる」式のごとく、お門違いの小さな原因が、複雑な連鎖を経て、予期しないものまで巻き込んでいく、予測困難な振る舞いに見えた。

米ソの冷戦終焉後、90年代、経済は自由化され、世界は巨大な資本に飲み込まれた。かつてのインターナショナリズムという国際地域間の相互理解や克服の課題は、多国籍企業によりグローバルイズムの名のもとで均質化されていった。同時に、近年の情報産業やテクノロジーの急成長は、人、もの、資本の移動という、かつてない程の運動エネルギーを生み出し、気付けばグローバル化の波が全世界を覆っていたのだ。多国籍企業が、利潤第一にあら

ゆるテクノロジーを駆使し地球全体を市場として事業拡張していった結果、地球規模で連鎖的に引き起こされる「経済破綻」と「環境破壊」の2大厄災を私たちにもたらすこととなった。

世界的な景気後退は、日本のバブル経済が崩壊した頃を思い出す。私が大学に入り、アートに興味を持ち始めた90年代初頭には、バブルは完全に崩壊、深刻な社会問題となった(プロジェクトを運営する広島市立大学自体、バブル期に計画された“バブル時代の遺産”である)。バブル経済崩壊後、真っ先に予算が削られたのが美術の分野であり、美術館は運営が立ち行かなくなっていく。日本にアートが根付いていないことの証明だった。予算の目処が立たず、本来の運営ができない美術館を横目に、アーティストは自らの表現を、日常の中に拡散させ始めた。広島アートプロジェクトも、その歴史の流れを汲む一つだろう。そんなバブル経済崩壊以降、再び日本はこの金融危機の大波にさらわれ、価値観がまたも転覆しかけている。そのような流動的な社会状況に対し、アーティストから発せられる提言とは、一体何だろうか。私は広島アートプロジェクトの活動を通じて、そのことを考えてきた。2007年には遊休施設となった旧ゴミ焼却施設内にて「ゴミがアートになる! 超高品質なホコリ」展と題し、既存の環境に対して、新たな視座の獲得を促す展覧会企画を担当した。2008年には「CAMP ベルリン」と題し、グローバル化の基点とも言える知識や経験、物質の移動について考察する企画立案に携わった。そして今回は、プロジェクトディレクターの柳幸典より、企画リーダーという形で、展覧会の企画運営全般を任されることになった。

広島アートプロジェクトのディレクターで、2007年、2008年の展覧会の指揮をとった柳は、プロジェクトの中心地に据える広島市中区吉島¹にいかなる価値を見いだしてきたのだろうか。まずそのことを簡単に振り返っておきたい。2007年の第1回目は、都市軸が繋ぐ平和問題と、環境問題を持った吉島の存在意義にスポットが当てられた。都市軸とは戦後、吉島北端に広島平和記念公園を建設する際、丹下健三によって作られた南北、東西に直交する軸線のことである。また2004年、吉島の南端に作られた谷口吉生による新ゴミ焼却施設は、都市軸を建物内に貫通させることで、軸線は瀬戸内海まで延長させられた。その新ゴミ焼却施設の操業が開始された際、取り壊せず産業遺構となった旧ゴミ焼却施設を、アートセンターにすべくこのプロジェクトはスタートした。次年度の2008年では、吉島の両端を流れる川の汽水性に着目している。山から海へ重力に沿って流れこむ淡水と、潮力によって海から川に押し上げられる海水、この二つの流れがせめぎあう場は汽水域と呼ばれ、多種多様な生命を育む豊かな水域となっている。そのせめぎあいの特性は、広島の戦争から平和に至る歴史や、国際性と地域性の問題を暗示するものとして、「汽水域」が展覧会のテーマに選出された。いずれも、吉島の特殊な環境から読み解かれた問題提起に加え、優れたテーマ設定がなされてきたように思う。

すでにある環境や、歴史から如何に意味を紡ぎ、文化都市をどのようにして再構成するかという、これまでの柳の考え方を継承し、それを発展的に検証する方法を私は模索した。結果、過去2回の環境の読み解きを、相互的に補完した新たな解釈を試み、先の景気後退により、破綻した価値観とは別の価値観を提示すべく「いざ、船内探検! 吉宝丸」展と題し、2009年度の企画を立ち上げた。周囲を海と川に囲まれ、特殊な都市環境を持つ吉島を、広島湾頭に係留された一隻の巨大な船に見立て、その船内に多数の文化遺産を積載した「宝船」と解釈した。本稿では、「吉宝丸」という造語に託した環境と経済の問題を、「船」と「宝」の二つの側面に分けて以下、論じてみたい。

2. 船へと建造、艦装化される葭島

文献²によると吉島は、江戸期以前では葭島と呼称され、広島市の中州にある葭の群生した小島に過ぎなかった。それが明治頃には大部分を造成、戦中には南端沖合が埋め立てられ、後にそこは陸軍飛行場として接收された。近年では新ゴミ焼却施設用地のため、最南端が更に拡張されている。現在の吉島には、旧船着き場が陸地中央に史跡となって埋もれていたり、造成の工法の違いから大きな断層が残っていたりする。このように島は断片的に増築を繰り返しながら、人工的な陸地として建造されていった。

小さな中州だった吉島も、造成されるに伴い、戦前には繁華街の一部を担う町となっていた。しかし現在の吉島は、繁華街より一步距離を置いた孤島のような印象を持っている。その理由は、広島の主要交通である路面電車の路線図を見れば、軌道線が吉島だけ回避するように、繁華街に張り巡らされていることに気が付くだろう。周囲の陸地との主要交通網との乖離は、吉島が平易にアクセスできる陸地ではないことを印象づけている。なぜ他の陸地から、吉島にアクセスする軌道線は造られないのだろうか。原因の一つに、北の突端を広島平和記念公園が覆っているため、軌道を引くことが容易でないことが考えられる。突端にある広島平和記念公園の存在が、吉島の特異性をより際出させている。

広島平和記念公園は、かつて対岸上空で炸裂した原爆の直撃を受け、壊滅した繁華街の上にてきた祈りの場であり、戦後広島歴史を象徴している。また吉島にはそういった広島平和記念公園や、被爆樹という負の遺産に加え、巨大な監獄や少年鑑別所、病院、工場地帯、そして新旧のゴミ焼却施設を有する(路面電車が走らない代わりに、ゴミ収集車が行き交う)。これら近代社会が、その存在を必要としながらも、都市から隔離、隠蔽してきた種の建築であり、この存在もまた特筆されるべきものであろう。

人工的に建造され続け、周囲から独立した環境にその身を置き、希有な歴史と特異な建造物を保有する吉島。このような都市を、

いわゆる戦後の均質化する都市の文脈で語るのではなく、目的と機能を連結させた一隻の巨大な船に見立て、独立したプラットフォームへと知覚の変容を促したい。

島や都市を船に喩えることは、別段、突飛な発想ではない。長崎に現存する「軍艦島」や、バックミンスター・フラーの地球を一つの船と提唱した「宇宙船地球号」、島が漂流し続ける人形劇「ひよっこりひょうたん島」とこれまでも、その種の見立ては見られる。そこで、私の考える船の見立ての定義を少し述べておきたい。例えば、一寸法師の乗るお椀は、船と呼べるだろうか。形状は一寸法師も乗り込める上、モノコック構造でできた申し分のない船である。しかし一寸法師が針を駆使し、自力で操舵し続けなければ、ただ単に水上を流れていく器にしか見えない。器と船を隔てているものは何か。それは自力航行するために必要な機関や、操舵といった機能が器に実装してあるかどうかだ。つまり、話を吉島に戻せば、造成された器（陸地）だけでは、船とは見立て難い。その中に航行できる各機能をどう見いだせるかが、私にとって大きな関心であった。そこで吉島に散らばる特殊な建築や空間を、吉島に艦装すると以下のような船体が組み上がった。

まず船の軸先には、原子爆弾の投下目標となった T 字型の相生橋を、船首像に掲げられる。船首デッキには、丹下健三設計の広島平和記念公園が広々と備えられ、船首両舷からはイサムノグチ制作の平和大橋と、西平和大橋が錨となり対岸へ打ち込まれる。船首から船尾まで貫く太い都市軸は、船体を支える竜骨の役割を果たす。船尾にはかつて陸軍航空本部の滑走路が、空母の飛行甲板のごとく備えられていたのだが、現在は谷口吉生設計の新ゴミ焼却施設が機関の役割を果たし、焼却時の廃熱を駆動力としている。また右舷船尾には、遊休施設となった旧ゴミ焼却施設を舵取り板に、船の行く末を決定する。船中央に位置する船橋はプロジェクトサイトであり、そこは無数の名もない建築や空間が操舵室となり、船長をはじめとした航海士たちが操舵することになる。この船は周囲に架かる 17 本もの栈橋によって広島市に係留されているのだ。

以上、この読み解きはかなり強引ではあるが、眼に見えない吉島の歴史的、文化的背景を、船の各部を構成する機能として有機的にネットワーク化し、ランダムな点在だと思われていた建造物が、その場に位置する必然性が与えられる。他にも歴史の焦点のあて方や、各機能の読み解き次第で、船そのものの解釈がいかようにも変化する。例を挙げるなら、現在の吉島は箱船的な要素を持つが、戦時中は、対岸に大本営を、艦尾に陸軍飛行場を配した航空戦艦だったとも言える。或いは最初に被爆した第五福竜丸ともとれる。また近年であれば、2007 年のプロジェクト時は、地域に芸術文化を開花させる黒船を演じ、2008 年次のプロジェクトでは、海外のアーティストたちと文化交易を果たした朱印船にも喩えることができるだろう。

いずれにしても、この吉島を船へと想像力を駆り立てるものは、

吉島の特異な歴史や環境、そして敷地内にある有形無形の遺産からくるものである。いまだ経済破綻の翳りを残す中、この遺産の検証をするべく、今回のプロジェクトでは敢えて「宝船」の暗喩を選択した。吉島が数々の財宝を積んだ宝船＝「吉宝丸（吉島の宝の船）」に見える、この発見こそが、このプロジェクトに際して最初に見いだした“宝”であった。

3. オルタナティブな価値としての宝

前回 2008 年のプロジェクト「汽水域」のアンケートで“展示の位置が分かりにくい”という不満の声に混じって“展示の位置が分かりにくかったが、それを探するのが面白かった”という回答を見つけた。大半の人が、美術館よろしく展示場所は“分かって当然”と思っている状況で、“分かりにくさ”に対峙した時、苛立ちを覚えるのは普通の生理現象であろう。しかしその一方で、自らの置かれた状況を理解し、コントロールして楽しむ人がいることに、少なからず驚かされた。（断っておくが、プロジェクトの情報提供の至らなさから、言葉尻をつかんで開き直っているのではない。）近年、あらゆる情報は、その精度を厳密に問わなければ、どこにいても瞬時に手に入る情報のネットワークシステムが確立されている。また最低限の情報提供は、サービス業では基本だろう。しかし、貫って当然だと思っていた情報が、全く得られなかった場合、外部端末から自らの思考に切り替え、身体機能を総動員して情報を 0 から収集・生成しなければ、そこから何も得られない結果が待っている。情報を消費する毎日の繰り返しではなく、自らの思考で情報を生成していくことに、豊かな創造性を感じる。なぜなら、与えられる情報は、誰かの手垢がついた二次データに過ぎないからだ。“展示の位置が分かりにくい”と“それを探するのが面白かった”では、情報を享受する側か、それとも新たに生産する側かの観点において、全く別ものであることに気が付いた。

世界的金融危機が、極端な格差社会をあらさまに露呈したように、資本主義社会は、皆が自由で平等になれるようにはできていない。学校では暗記の仕方や、解答の定まった問題の解き方は教えてくれるが、格差のような差別や、不条理をどう乗り越えればよいかといった、解答が出ないことは教えてくれない。一方、社会においては、労働法の改正以前であれば、企業が実践業務の中で、正規社員に解答のない解答をその都度教えていただろう。しかし労働法改正後、コスト削減によって増加した派遣社員や、契約社員といった責任のない立場の非正規雇用労働者を、企業は費用と時間をかけて教育しない。学校や、企業が教えられない流動的な現在の価値観に対し、現代アートはオルタナティブな価値観を社会に提示できるのではないかと考えた。なぜなら、現代アートは、アーティストの個人的な発露による公的な表現であるから

だ。その有用性は、理不尽や偏見、先入観、不条理、葛藤など社会で忌み嫌われるものが、堂々と作品に組み込まれていることにある。これらは人間の負の側面だけではなく、自分以外に、全く別の価値観が多層的に存在していることを示す。違いがあるからこそ、世界は複雑になり面白いのだと教えてくれる。アートは誰も教えられないことを、直感的に伝えることができる唯一のメディアなのだ。解答のない知識や知恵、血や肉となる経験や情報を得ることは、個人の価値観を形成する重要な役割を持っている。これらは、待っていても誰も与えてくれないし、向こうからやってくるものでもない。自らその価値を探し、発見し、丹念に時間をかけて磨いていくものだ。この考えが、先のアンケート“探すのが面白い”を加え、今回の企画テーマの核とした“宝探し”に他ならない。これは、2007年に私が企画担当した「超高品質なホコリ」展の地域展開型バージョンと言えるかもしれない。

日用品やゴミを使って作られた作品が、広い吉島中に点在して埋もれている。鑑賞者は自転車に乗って作品=宝を探しにいく訳だが、その際、市街地や郊外に見られる大規模な開発から逃れ、今もなお昭和の佇まいが残る個人経営の店舗や、大量に存在するお好み焼き屋と公園、ゴミ焼却施設の廃熱を使った共同浴場、監獄の高い塀の陰で、原爆の火災から免れた路地といった、吉島独特の異界をかき分けて進むことになっただろう。吉島には他の都市にはない魅力的な宝が、沢山眠っているのだ。

案内所で貰った分かりにくい地図を片手に、右往左往して作品を発見したのも束の間、それは、ただのゴミか日用品か、与えられた情報だけでは、判別しにくいもので一杯だ。物の発見だけでは、知的な興奮と愉悅は得られない。作品は何で、どのように作られ、なぜこの場にあるのか等を観察力と、想像力を駆使して思考を巡らせなければ、本当の作品=宝には到達しないのだ。見る側は受け手の立場ではなく、積極的な読み解きを促される。都市空間で身体感覚を使って地域と作品の探索、加えて脳内空間で作品に関する思索という二重の“船内探検”を通して、体験と知が共有される。

「吉宝丸」展には、私と同世代の若いアーティストが、多数参加してくれた。彼らはバブル経済崩壊後の「失われた10年」と呼ばれる時期に、アーティストを志、平成不況を生き残ってきた。お金をかけたスペクタクルな作品よりも、少しの所作で価値を錬成し、作品を通して鑑賞者との出会いの場や、知の共有を促す表現に特徴がある。また参加してくれた多くのアーティストは、短期間で地域に溶け込み、自らの居場所を直感的に嗅ぎ分け、見つける能力に長けているようであった。

この項の締めくくりとして、展覧会と、出品作品の新たな関係の発見について述べておきたい。それは、私の立案した企画展に対し、自らの企画を入れ子状に展開してくる作品が複数、散見したことだ。例えば、全く別の企画展を開催した辻原咲紀の《YoDA 展／The Yoshijima DOREDEMO Art 展》、山城大督の素人の自宅で行なわ

れる《吉島・ピアノ・レッスン・コンサート》、独自のスタンプリューのルートを作った寺江圭一郎の《毎日記念スタンプ》、王冠はいつどこに何個隠されたのか、全貌の明かされない鹿田義彦の《吉島埋蔵》、様々な場所に点在する石彫と、漫画が補完しあい物語を作る小笠原周の《究極奥義》など、独自のルートを持つこれらの作品は「吉宝丸」展を構成する一要素でありながらも、一元化された主従関係を拒む。鑑賞ルートは、主要を含め四重、五重と複雑にクロスし、多様性と矛盾を孕んだ展覧会となった。展覧会とは、出品作をその枠組み内に包括するツリー構造型の近代的な制度だが、アーティストはそれを特定の中心を持たないイゾーム型へと分解、再構成しようと拮抗させた。それは、喩えるなら一元的なイデオロギーに管理される“金”ではなく、個々それぞれの尺度(価値基準)をもった“宝”として、新しい価値観の萌芽と感じるものであった。

4. 小さな蝶の羽ばたきが地球の裏側で台風を起こす

広島は過去にも、原爆による壮絶な「環境破壊」と、バブル経済崩壊による長期の「経済破綻」という2大厄災を経験してきた。特に64年前、小さな原子の振る舞いが、軍事都市を一瞬にして壊滅させた環境破壊は、世界でも類を見ない。瞬間的に発生する高熱と爆風だけの爆弾ではなく、人の遺伝子に作用する火球として、生き残った人が継承し続けなければならない出来事となり、未来のあり方を決定づけられた広島。その負の経験から学べることもある。その一つが、ミクロな振る舞いでも、連鎖反応の仕方によって、マクロな都市に干渉できる可能性だ。例えばそれは戦後すぐに、市民の声によって生まれた「広島市民球場」を思い出させる。それは他の都市のように、大企業による設立ではなく、小さな市民の力が結集して生まれた戦後初の文化ではなかっただろうか。市民球場の照明は、復興する広島を勇気づけ、明るく照らし続けた。復興後の経済成長一本槍も、バブル崩壊により終焉、市民球場もその役目を終えて、別の場所に移転した(これも市民の力による)。

広島市民には一人一人の連帯性、潜在力が眠っている。それは遺された者たち、そして新しく生まれた者たちに、遺された力、継承されてきた宝なのではないだろうか。広島地域や、都市を巻き込んで行なう、このアートプロジェクトを通して、小さな発信が、多様な価値観を有する地域住民を媒介し、連鎖、共鳴して、やがて大きな動きに発展していくことを期待してやまない。

付記

共に歩んできた吉島地域と、プロジェクトの運営について付け加

えて述べておきたい。思えば2007年、プロジェクトの立ち上げ時は、ディレクターの柳を除けば、スタッフ内にアートマネージメントできる人材はいなかったし、外部の協力者も0からのスタートであった。発表できる場を自分たちで歩いて探し、交渉し、協力者を集めながらこの3年間、広島アートプロジェクトは人の繋がりにおいて急成長してきた。この3年間で培ってきた人間関係と経験が、プロジェクトにとって何物にも代えられない財産である。その成果として「吉宝丸」展は、具体的な企画立案を含め4ヶ月弱の準備期間にも関わらず、実現まで漕ぎ着けたことが如実に示している。展示会場は、継続の意思表示も含め前年の「汽水域」と同様の空きビルや商店、公共施設を借りたいと企画当初から考えていたが、このネットワークが無ければ、新規開拓だけでの実現は不可能であっただろう。これは1年目の「わたしの庭とみんなの庭」展や、「旧中2」の企画担当者として地域にガチンコで飛び込み、地域の方々から信頼を得てきた今井みはるの力によるもの大きい。加えて、地域住民の方々の協力がなければ成立しない作品プランが数多くある中で、今井はアーティストと地域を地道に繋げる重要な役割を果たした。また「汽水域」でデザインを担当した齋藤彩佳は、今回は広報として、観光センターや交通機関、図書館などと連携して、多種多方向からのアクセシビリティ向上を図った。その一方、地域の女性会の方々を巻き込んで、参加アーティスト、スタッフとともに各自のオリジナルカレーをクロージングパーティーで持ち寄って貰う企画も行なった。女性会の方々は、これまで食材等の差し入れをいただいていたが、物資ではなく知恵や経験を提供してくれたことはプロジェクトにとって大きな前進であった。また今回の運営は、広島市立大学芸術学部現代表現研究室の学部生5名が、企画立案から私と共に考え、プロジェクトを実際に動かす原動力となり、地域に足繁く通いながら住民の方々と協働してくれた。「汽水域」の運営サポートした時の経験が、存分に活かされた形であった。私が会期中、上海アートフェアやリヨンビエンナーレに招待され広島に不在の間も、学生を中心としたスタッフで展示期間中の様々なイベントを運営してくれた。このスタッフは、アーティストを志して大学で学ぶ経緯を持つので、作家、運営スタッフ、鑑賞者それぞれの視点を切り離すことなく共有して持っている。だからこそ、運営面においても出会いの場を作るといふ、作品制作の延長上で思考し、個々が持つアーティストとしての創造力を遺憾なく発揮できたように思う。

地方都市に地産地消型のすぐれた文化を生むのは、アーティストや美術館といった提供側だけの力ではないと言うことが、地域展開型のプロジェクト運営を通して分かる。美術館やギャラリーだとその機能上、見る側と見せる側、或いは、提供する者と消費する者の二項だけで見られやすい。しかしどんなに良い企画や、作品が提供されたとしても、受け手となる鑑賞者や、間に立つ運営スタッフに創造力がなくては、文化としてその地に根付きにくい。

作品や企画が未知のすぐれたものであればあるほど、高い知的感受性や、新しいものを受け入れる心の準備が要求されるだろう。グローバル化された社会では、海外から最先端の表現に触れる機会が増えるであろうが、逆説的に、見る側と見せる側の距離は増々広がっていくだろう。もしこの先、広島が自立的循環型の文化都市を目指すならば、鑑賞者となる地元の方々と、触媒となる運営スタッフの創造力が重要な鍵になるのではないだろうか。

今回参加アーティストとして吉島東集会場に出品した岸かおるは、以前吉島に住む住民だったそうだ。それが縁で1年目のプロジェクトの時、ボランティアとして会場の監視をしていただき、2年目の「汽水域」ではインターン生として運営をサポートしていただいた。3年目の「吉宝丸」では、作品プランをプレゼンしていただいた上で、ついにアーティストとしてプロジェクト参加に至った。その出品作《傘 de family》は、家に納め込んで使わなくなった傘を地域の方から譲り受け、分解・再構築した作品だが、そこには岸自身が地域住民であり、鑑賞者であり、運営者でありながら、それらの視点を同じ地平で繋ぎあわせた等身大の表現者であることが体現されている。めずらしい事例かもしれないが、そのような岸との出会いに、地域で展開するプロジェクトの可能性があるのだと感じた。

反面、都心部へ人材流出が止まらないことも事実だ。地方都市で人材を育てても、優秀な人材ほど都心部へ去っていく。情報環境が飛躍的に整備され、交通インフラが向上されたにも関わらず、この吸引的な構図は、数十年前から何も変わっていない。おそらく、広島に魅力的で文化的な受け皿がないことが、大きな要因の一つだろう。このような草の根的なプロジェクトの活動は、ディレクターの柳がシンポジウムで語った“子どもを育てるようなもの”という言葉通り、もう少し長い目で見ながら、継続させていかなければならないのだろう。理想がすぐ現実にならなくとも絶望しないことが大事なのかもしれない。あきらめず継続していけば、いずれ光明が見えてくることを信じたい。現に優秀な人材が、全て都心部に吸収されている訳ではないのだから。

最後になったが、準備が短期間にも拘らず、最後まで粘り強く共に展覧会を作り上げてくれた9名のコアスタッフ及び、現代表現研究室のスタッフ全員に深く感謝の意を表したい。また未熟な企画リーダーゆえに、多大なるご迷惑をおかけしたにも拘らず、素晴らしい作品を出品していただいた43組のアーティストの方々ははじめとして、11名のインターン生、大勢のボランティアの方々、そして地域の皆様のご尽力がなければ、展覧会をオープンさせることはできなかった。この場をお借りして御礼申し上げます。

1 元安川と本川に挟まれたデルタは、中島町、加古町、住吉町、羽衣町、そして吉島町で構成されているが、統一した名称が無

いので、この論考では便宜上、総称して吉島と呼称させていただく。

- 2 吉島のあゆみ編纂青年グループ編『吉島のあゆみ』（吉島地区社会福祉協議会 広島市吉島公民館、1979年）

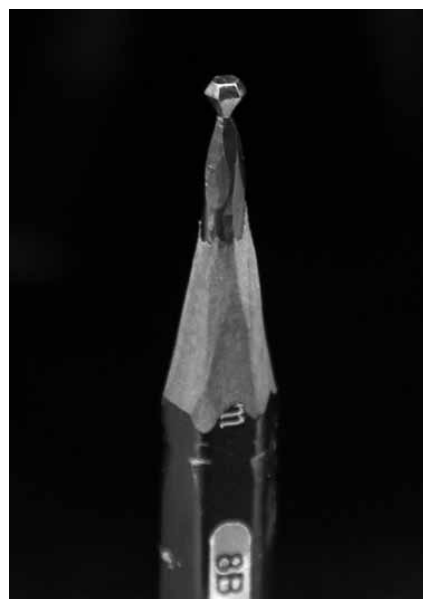
本稿は、『広島アートプロジェクト2009「いざ、船内探検！吉宝丸」展』（広島アートプロジェクト、2010年）に掲載した「いざ、船内探検！吉宝丸」を再録したものである。



イラストレーション：坂本史（芸術学部学生）
 展示会にあわせてデザインされたポスター。カラフルな大漁旗のデザインをベースにした目を引くポップなデザイン。



《スケルトン》祐源紘史（芸術学研究科修士）
 ケンタッキーフライドチキンを作家が実際に食し、残った骨でキャラクターであるカーネルサンダースの骨格に再構築させた作品。



《C》入江早耶（芸術学部研究生）
 鉛筆の芯から掘り出されたダイヤモンド。安価な芯も高価なダイヤモンドも元は同じ炭素であることを、機知に富んだ手法で想起させる。



《路上山水図》水口鉄入（芸術学研究科大学院生）
 工場外壁の汚れを衛生用品によって剥離することで、山水画を出現させ、価値の転倒を図った作品。



《エンプティネス》石黒健一（芸術学研究科大学院生）
 二灯式白熱灯の片側電球は、作家の手で大理石から精巧に彫られている。現代の工業技術と西洋の古典技法を融合させた作品。



《ピンクの髪の少女》本間美穂子（芸術学部生）
 美容院の看板に描かれた女性キャラクターを主人公に、6つの短い物語を張り出した作品。文学世界と地域空間が交錯する。



《吉島埋蔵》鹿田義彦（芸術学研究科大学院生）
町中に隠された"王冠"をトレジャーハンティングする参加型作品。作家が磨き上げた小さな王冠を探しながら、地域という宝に触れる。



《皮膚》鹿兒島藍（芸術学部生）
皮膚と同成分のコラーゲンをのぼしたものを、作家の髪の毛で縫い合せたドレス。抜け殻のような透明なドレスは、宝石のよう。



《ヨシジマボックス》新澤望（芸術学部生）
風景の人工物のみ黒く塗り潰されたコマ送りの映像作品。直線的なスカイライン、整然と残る植樹等に都市の抑圧、制御性を見てとれる。



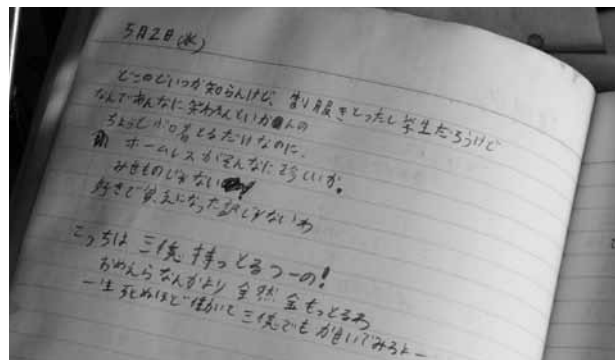
《サム・ピープル・キャント・ヘルプ・プレイング》土井翔太（芸術学部生）
使い古された箒に小型マイクを取付け、スピーカーを仕込んだ室外機との連動で、誰でも箒ギタリストになれる参加型の作品。



《バンドーラー》諫山元貴（芸術学研究科大学院生）
壺が水中で静かに崩壊していく映像。形象崩壊しながらも、内部から煌めく多量の粒子が舞い上がり、別の可能性を示唆する。



《傘de Family》岸かおる（芸術学部研究生）
家族の傘を集め、大きさや色、柄の違う傘布を解体し、一つの傘に再構成させている。家族のあり方を改めて問うた作品。



《三億円事件》岡田寿枝（芸術学部生）
未解決である3億円強奪事件の犯人を装い、事件発生から時効を迎えるまでの犯人の苦悩と不条理を、日記と隠れ家でコミカルに作品化。

開催概要

広島アートプロジェクト2009「いざ、船内探検! 吉宝丸」展

会 期：2009年9月5日(土)～23日(水・祝)
会 場：広島市中区吉島地区各所(広島市吉島福祉センター、吉島東集会所、ぎんざ化粧品店、光南四丁目町内会ちびっこ広場、キリン木材株式会社、吉島老人いこいの家、南吉島一丁目町内会ちびっこ広場、ボートパーク広島、広島市環境局中工場、高速3号線工事現場仮囲い、山陽倉庫株式会社(壁面)、フレスタ吉島店、吉島稲生神社、デイ・リンク吉島店、屋内駐車場、など)

参加作家：43組

主 催：広島アートプロジェクト実行委員会
共 催：広島市立大学、財団法人広島市ひと・まちネットワーク吉島公民館
助 成：平成21年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業、財団法人文化・芸術による福武地域振興財団、財団法人アサヒビール芸術文化財団、財団法人朝日新聞文化財団

特別協賛：広島バス株式会社、株式会社フレスタ

協 力：アサヒビール株式会社、エプソン販売株式会社、広島市中区社会福祉協議会、広島市中区吉島学区社会福祉協議会、広島市中区吉島東学区社会福祉協議会、広島市吉島福祉センター、広島ボートパーク株式会社、広島市立吉島小学校、広島市立吉島東小学校、有限会社土岸新聞舗、株式会社中国新聞販売センター

後 援：広島市中区光南四・五丁目町内会

シンポジウム

平成21年度文化庁「文化芸術による創造のまち」支援事業
「持続可能なアートを育てる」

日 時：2009年9月19日(土) 14:00-17:00

会 場：広島市吉島公民館大集会室

パネリスト：木ノ下智恵子(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師)、野田恒雄(no.d+a (number of design and architecture) 代表、TRAVELERS PROJECT 主宰)、細淵太麻紀(BankART1929)、山出淳也(NPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事、アーティスト)、柳幸典

モデレーター：加治屋健司(芸術学部准教授)

主 催：広島アートプロジェクト実行委員会



《いくつかのはなし》増田純(芸術学部生)
都市の共有設備を擬人化させ、周囲の環境への葛藤や秘密、噂話が語られた作品。偶然性と恣意性が交錯し都市の不気味さを感じさせる。



ワークショップ「1000年後のプラスチック動物あらわる！」
《FRESTA plastic FOREST》キッズアーティスト feat. 梶木淳子(芸術学部生)
プラスチック材の耐久年数"千年"を生命の寿命と捉え、地元の小学生と共に不要となったプラスチックで、未来の動物を制作した。



多数の学生がインターン生、ボランティアとしてプロジェクトを陰で支えた。写真は佐野研二郎の作品をインターン生が制作中。